

野田宇太郎 文学散歩 第19卷

文一総合出版

著者略歴 明治42年(1909)10月、福岡県筑後松崎に生れる。朝倉中学卒業後病気で学業を断念、久留米で詩作に入る。東京に移住して昭和23(1948)年まで、出版編集に携わる。その間、雑誌『文藝』、つづいて『藝林間歩』の編集責任者となり、以後、著述生活に入って詩作と近代文学史研究に専念。『新東京文学散歩』に始まる文学散歩を発表して“文学散歩”を創始。文学散歩の他、全詩集『夜の蜩』、近代文学研究『日本耽美派文学の誕生』、木下杢太郎研究『きしのあかしや』、近代詩史『詩人と詩集』、キリシタン史『少年使節』、紀行随筆『日本の旅路』、戦中記録『灰の季節』、戦後記録『混沌の季節』など著作多し。昭和16(1941)年、第1回九州文学賞(詩)受賞、昭和50(1975)年度藝術選奨文部大臣賞受賞、昭和52(1977)年、第3回明治村賞受賞。

野田宇太郎文学散歩 19

関西文学散歩 大和・紀伊・兵庫篇

昭和52年11月10日 初版第1刷発行

著者 野田宇太郎

発行者 佐藤 弘一

発行所 株式会社文一総合出版 東京都千代田区神田神保町1-32
電話東京(291)8049 振替東京2-42149

©1977 0395-90119-7354
定価は、函・帯に表示してあります。

印刷・製本 奥村印刷

目 次

大和

奈良坂にて

二七

浄瑠璃寺へ

二二

途上 『古寺巡礼』

鹿の歌

二七

會津八一の業績 『鹿鳴集』

大仏殿にて

三三

『大仏開眼』 幸田露伴のこと

登大路界限

三九

廣津和郎と小出檜重 鷗外の宿舍

正倉院

四三

絹道路の終着点 鷗外の短歌

上高畑の路

五二

采女哀話

五四

春日野

五七

月光菩薩と広目天	六
新薬師寺と白毫寺	七
枯野の夢	七
秋篠寺	七
唐招提寺	七
西の京をゆく 鑒眞と芭蕉	七
薬師寺	九
法隆寺	三
ああ大和にしあらましかば	三
法隆寺裏山より 夢殿附近	三
斑鳩物語	三
高濱虚子の写生文 大黒屋にて	三
法輪寺から法起寺へ	三
人麻呂の墓を尋ねて	一〇一
赤人の塚	一〇四
飛鳥	一〇七

『吉野葛』

二一

南朝の悲歌

二四

竹林院にて

二七

西行庵跡を訪う

三三

芭蕉と藤村

苔清水

月ヶ瀬

三六

梅の月ヶ瀬

月ヶ瀬の宿帳

続・月ヶ瀬の宿帳

紀伊

高野山

三五

夜の登山

「心中万年草」

奥の院にて

和歌山と漱石

一五

『行人』と日記

和歌の浦

一六

ミューズの国

紀三井寺

黒潮に沿って	一七
南方熊楠のこと	
潮の岬にて	
浜木綿	
勝浦の海	一八
旅の牧水	
暗い波と秋刀魚の歌	
雨の那智山	一六
潮騒の町	一六
詩人の恋	一五
「望郷五月歌」	
「渚の薔薇」	
丹鶴城址	一九
こぼれ松葉を	二〇
蛇性の姪	二〇
大石誠之助の墓	二〇
與謝野寛の「誠之助の死」	
幸徳事件と新宮	
春夫の「愚者の死」	

阪神兵庫

伊丹にて

三三

酒と俳諧

墨染寺の鬼貫墓

昆陽へ

尼崎と文学

三〇

僧契沖と近松と

広濟寺の近松の墓

西宮と泣菫

三六

分銅町の家

芥川龍之介の歌

夙川のほとり

三四

蘆屋の印象

四五

蘆屋マダム

二つの訪問

蘆屋川界限

二五

天知道宅と秋聲の「蒼白い月」

洪水と『細雪』

「枯木のあ

る風景」

神戸と近代文学

二九

生田川

二六

蘆屋処女の物語と鷗外の戯曲

『処女塚』と万葉集

壮士の

塚から生田川へ

岡本と魚崎

ヘルンとモラエス

神戸移住幹旋所

異国情調

教会と貧民窟と

楠公さんと『放浪記』

福原懐古

六甲と有馬

露伴の旅 山頂にて 温泉めぐり

子規と神戸

喀血 須磨のヘルメット

須磨のあちこち

芭蕉と藤村 敦盛塚と須磨寺 笛の音

二七〇

二七三

二七六

二七九

二八三

二八五

二八八

二九一

三〇〇

三〇六

播磨

紫のなぎさ

三二七

明石の眺め

三三〇

旅人牧水と明石

三三三

西林寺の荷風

三三六

人丸神社にて

三三〇

播州平野

三三三

姫路の城

三三六

白い不死鳥

クルスの謎

お夏清十郎

三三二

姫路の恋唄

井戸と比翼塚

室津旅情

三三六

類唐 清十郎生家と夢二の絵と

加茂の明神

浄運寺の伝説

三三六

海の眺め

赤穂・太子・龍野

三六四

龍野と獨歩

三六七

出生の秘密 戸籍と墓

ふるさとの歌

三七三

詩人露風と龍野 聚遠亭の詩碑

三木清の故郷

三七九

路傍の詩碑

三八二

淡路

淡路島

三八七

洲本と文学

三九一

洲本にて

三九四

「蓼喰ふ蟲」の宿 泡鳴追想 青嵐句碑と紫影故家

由良の門の歌

四〇三

嵐雪の故郷

四〇九

淡路とオルガン

四一〇

淡路陵薄暮

四一一

灘と沼島

四一二

鳴門

四一〇

関西文学散歩

大和・紀伊・阪神
兵庫・播磨・淡路

おぼえがき

本巻は「関西文学散歩」第三巻で、関西篇はこれで終る。内容は奈良県、和歌山県、兵庫県で、大和、紀伊、阪神兵庫、播磨、そして淡路の各篇に分れている。これらの原稿をはじめ大阪読売新聞に発表したのは昭和三十一年秋から翌三十二年春にかけてであった。その中には兵庫県の一部として但馬も含まれていたが、この決定版全集では「山陽山陰文学散歩」の山陰篇に収めた。そのほか最初に大和篇を書くに当って、ついに行き得なかった月ヶ瀬の部分は、ようやく昭和三十七年と昭和四十二年に書きあげていたので、その年月を名記して本巻の大和篇に収めた。

(著者)

関西文学散歩

大和・紀伊・阪神兵庫・播磨・淡路篇

